

SSS035-10

会場:国際会議室

時間:5月24日 08:45-09:00

1707年宝永地震震源域の東端位置(2) Location of the eastern end of source area of the 1707 Hoei earthquake (2)

中西 一郎^{1*}

Ichiro Nakanishi^{1*}

¹ 京都大学 理学部 地球物理学教室

¹ Dept. Geophysics, Kyoto University

宝永四年十月四日(1707年10月28日)に発生した東海-南海地震(以下宝永地震)の震源域の東端位置を推定するため、文献史料を調査した。

矢野・中西(2003)及び中西・矢野(2005)は、主に伊豆半島西岸地域に残されている棟札の地震記録(非文献史料)に基づいて、宝永地震の震源域東端は駿河湾の奥までは達しなかった、と推定した。この推定は瀬野(2011)による宝永地震震源域のモデルとも矛盾していない。

本論ではこの推定を支持する文献史料3点を示す。

- (1)「大地震富士山焼出之事」(『浅間文書纂』, 昭和6年)。
- (2)「大地震富士山焼之事覚書」(飯作家文書)。
- (3)「覚書 第三十五」(土屋家文書)。

本論に関連する各史料の特徴を記す。

(1) 富士山本宮浅間大社(静岡県富士宮市宮町1-1)が刊行した『浅間文書纂』に掲載されている。現在は行方不明である。武者史料の第2巻にも収録されている。昭和6年当時でも史料の状態は良くなく、冒頭から解読出来なかったようである。(宝永四力)丁亥十月四日昼7ッ上刻地震動ありから始まる。

(2) 飯作家(静岡市)が所蔵する。状態は良く全文を解読することが出来る。新収日本地震史料の続補遺別巻にも収録されているが、全文は翻刻されていない。どこでの状況・被害を示す箇所が翻刻されていない。全文を読めば(1)の写しであることが解る。宝永地震・噴火に関する重要な記録である。この記録によると十月四日に発生した本震より翌五日明六ッ少し過に発生した地震(余震)による地震動の方が大きく、家屋の被害及び人馬の死が多かったことがうかがえる。

(3) 土屋家(沼津市)が所蔵する。宝永地震時の土屋家の住居も現在と同じく駿河湾岸に近く、もし大津波が発生していれば津波被害を受けていたと考えられる。この土屋家文書に於いても四日の本震については単に「大地震」、翌五日については「又ゆり夥敷事也」と書かれており、本震よりも翌日の余震による地震動の方が強かったことがうかがえる。他地域での地震・津波の被害には言及しているが、住んでいた現在の沼津市原に関する記述はない。

上記のように、静岡県富士宮市宮町および沼津市原においては本震による家屋・人の被害よりも翌日朝の余震による被害の方が大きかった。また本震による津波被害を示す記述もない。伊豆半島西岸での調査(矢野・中西, 2003; 中西・矢野, 2005)も考慮すると、宝永地震震源域の東端は駿河湾の奥には達していなかったと考えられる。宝永地震本震の震源域の推定には翌日朝の余震の分離も含め再検討が必要である。

文献

矢野信・中西一郎, 2003. 天井裏の大地震記録: 棟札地震史料 収集と考察, 地球惑星科学関連学会 2003 年合同大会, S045.

中西一郎・矢野信, 2005. 1707 年宝永地震震源域の東端位置, 北海道大学地球物理学研究報告, 第 68 号, 播磨屋敏生教授退官記念号, 255-259.

瀬野徹三, 2011. 南海トラフ巨大地震 その破壊の様態とシリーズについての新たな考えー, 地震, 投稿中.

キーワード: 歴史地震, 宝永地震, 巨大地震, 震源域, 南海トラフ, 駿河湾

Keywords: historical earthquake, Hoei earthquake, great earthquake, source area, Nankai trough, Suruga Bay